HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ダビデの町」と「ミロ」
Author(s)	山崎, 保興
Citation	基督教学, 15, 24-26
Issue Date	1980-07-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46386
Type	journal article
File Information	15_24-26.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「ダビデの町」と「ミロ」

山崎保興

元来エブス人の城砦であった「シオンの要塞」をダビデが取得し、これが「ダビデの町」と呼ばれるようになったことはサムエル記下五・七、九及び歴代志上一一・五によって知られるのだが、この場合ダビデとその一党が「エルサレム」へ行って「その地の住民であるエブス人」を攻めた(サムエル記下五・六及び歴代志上一一・四)ことが前提として記されており、殊に歴代志においては「エルサレムはすなわちエブス」とされている。以上の脈絡からエルサレム＝エブス、シオンの要塞＝ダビデの町という同定関係が成立つことは言うまでもないが、前者と後者が必ずしも同一範囲を意味するものでないことは、ダビデがエブス人アラウナから「ダビデの町」から北へ上った地点の台地の一部を入手したという記事からも知られる(サムエル記下二四・一八―二五)。そして「ダビデの町」が南方丘陵上に限定されることは既に触れた。

ここにダビデ時代のエルサレムの人口についての推計がある。[1] 王族四〇、宮廷官僚及び使用人一〇〇、常備軍六〇〇、外人傭兵隊六〇〇、一般官僚六〇、祭儀奉仕者一〇〇、以上の家族四、〇〇〇、総計五、六〇〇となる。一方「ダビデの町」の総面積は約一二エーカー(四・八ヘクタール)であるから居住可能人口は約二、〇〇〇と考えられ[2](計算基礎については紙数の関係で省略)、差引き三、六〇〇が町の城壁の外に居住したことになる。都市の周辺に農村部が付随することは古代都市国家についての常識であるが、この場合にはいずれにしても「エルサレム」と総称される範囲内にとどまるものと考えることが自然であり、その後のエルサレムが専ら「シオンの要塞」から北方および西方の丘陵地帯に展開してゆく経過からすれば、右の超過人口も主としてこの地域に居住区をもったものと考えられるが、さしづめここで直ちに念頭に浮ぶのは例の「ミロ」のことである。

「ミロ」と称される建造物が、丘の斜面を利用して段丘状に居住面積を拡大していったものであることはその構造上明らかである(前号掲載「研究ノート」参照)。ダビデは「ミロから内の周囲に城壁を築いた」(サム

エル記下五・九）とされ、また「ミロから四方に石がきを築き」（歴代志上一一・八）と記されているが、エブス人の「シオンの要塞」が元来保有していたミロを土台としてダビデが囲壁を築造した状況がうかがわれる。

列王記上九・一五によると、ソロモンは「主の宮と自分の宮殿とミロとエルサレムの城壁とハゾルとメギドとゲゼルを建てるため」に強制労働を課した。神殿と宮殿は「ダビデの町」の北方丘上に新たに設営された「ソロモンのアクロポリス」に属するが、ミロは明らかにダビデ時代のそれの増強であり、列王記上一一・二七の記事と照合することによって、ダビデ時代の囲壁が一部（恐らく北辺部）未完成であり、ソロモンはそこに新たにミロを建造することによってこれを補強した。このことは同時に（前号でも触れたように）彼自身のアクロポリスと「ダビデの町」とを明確に区別したことにもなる。「ダビデの町の破れ口」は半面恐らくそのまま北方台地への通路でもあったと考えられるからである。ミロの補強が直ちに居住区拡大を意味するものであることは前述の通りであるが、後に」オペル」が築き上げられることになる南北の中間地帯（当時はまだ浅い谷間であったはずである）にも当然人が住んでいたと考えねばならない。前記「エルサレムの城壁」というのは即ちこの三つの部分（「ダビデの町」と「ソロモンのアクロポリス」と両者の中間地帯と）を総合的に防衛するための囲壁のことに違いない。この場合その囲壁線が東の丘斜面のどの線を走っていたかは未だ不分明であるが、後にネヘミヤによって回復されたエルサレムの城壁線が丘の頂上陵線に沿っていたことは既に確認されている（このことは前号にも述べた）。

ところで一九七八年夏に開始されたイスラエル隊による最初の「ダビデの町」発掘調査（ヘブライ大学イガル・シロ教授指揮）は、既にかつてキャスリン・ケニヨン女史によって行われたギホンの泉直上線斜面の発掘（そこに「ミロ」が発見された）の跡を、その頂上部分において更にいっそう徹底的に探査すべく継続されているが、早くもその最初のシーズンにおいて、前記ネヘミヤの城壁遺構の下部にヒゼキヤ時代の巨大な傾斜堡塁の部分が露出した[3]。その後の情報を得ていないので以下は推測の域を出ないが、これを東の丘斜面下方に向って想像上延長してゆくと明らかに「ミロ」はその外側に位置づけられることになり、歴代志下三二・五の記事の関係構造が判然としてくる。ここから幾分飛躍的に推論すれば、そ

もそもダビデ時代から「ミロ」の居住区は概ね城壁外にあったものと考えられ、サムエル記下五・九の記事は文字通りに了解できるのである。

註

(1) Tomoo Ishida; The Royal Dynasties in Ancient Israel. (BZAW 142, 1977) p. 133.

(2) Magen Broshi; Estimating the Population of Ancient Jerusalem (Biblical Archaeology Review Vol. IV, No. 2, June 1978).

(3) Yigal Shiloh; Digging in the City of David (BAR Vol. V, No. 4, July/August 1979).